

H369.4

B83

日汉对照世界名著丛书

1

简·爱

(上)

原 著 夏·勃朗特

中文翻译 黄源深

日文翻译 远藤寿子

编 校 刘树仁

吉 林 大 学 出 版 社

320.12
日汉对照世界名著丛书

简·爱

(上、下)

原著 夏·勃朗特 日文翻译 远藤寿子
中文翻译 黄源深 编 校 刘 树 仁

责任编辑、责任校对:张显吉

封面设计:张沐沉

吉林大学出版社出版
(长春市东中华路 37 号)

吉林大学出版社发行
吉林省劳动彩印厂印刷

开本:850×1168 毫米 1/32 1998 年 6 月第 1 版
印张:25.75 插页:2 1998 年 6 月第 1 次印刷
字数:963 千字 印数:1—6000 册

ISBN 7-5601-2125-X/I·992 定价(上、下):34.00 元

出版者的话

为了提高日语学习者的阅读能力和兴趣，加深对日本语言文化的理解，我们邀请了吉林大学部分日语专家和学者编写了日汉对照世界名著丛书（全译本）第一辑。

本辑所选世界名著，日文采用日本最著名版本（《雪国·伊豆舞女》为日文原作，《简爱》、《茶花女》、《少年维特的烦恼》为日文精典译作），中文采用译林出版社译本，均出自我国著名翻译家之手。因此，所选版本具有权威性。

丛书采用同面相对的日汉对照方式，即日文原文与相应的中文同面对应，这样便于读者参照阅读，在两种语言环境中体会世界名著的魅力。

丛书充分考虑到了日文和中文的不同阅读习惯，在版面安排上，日文纵排，中文横排；日文排在上，中文排在下，既相互对应，又独立成文。使用文字字体也均采用日文和中文的通用字体，印刷上色调略有差别。为了达到同面相对的目的，丛书每面的中文字距和行距略有调整，用两个空格代替分段回行。既保持了日文的完整性，又保持了中文的文学艺术性。

本辑的出版，得到了日本岩波书店、日本在华日语专家东海林健先生、吉林大学外语学院的部分专家以及江苏译林出版社竺祖慈先生等的支持和帮助，在此一并表示深深地谢意。同时，由于我们的水平和力量所限，不足之处在所难免，敬请读者不吝赐教。

吉林大学出版社

1998年5月



簡・愛 第一章

—

その日はとても散歩ができそうもなかった。私たちは朝のうちこそ葉の枯れおちた灌木の林の中を一時間散歩したけれども、ディナーがすんでから（リード夫人はお客様のない時は、早目にディナーをすませた）冷たい冬の風が吹きだすと、空に薄黒い雲が出てきて、身にしみるような冷たい雨が降りだしてきたので、もうこれ以上戸外の運動は思いもよらなかった。

私はそれが嬉しかった。私は長い散歩が嫌い、殊にうすら寒い午後には大嫌いであった。手足の指がかじかんんだり、保母のベシーに叱られて悲しくなったり、イライザや、ジョンや、ジョー・ジアナよりも自分の体質が劣っているのに、ひげ目を感じたりして、うすら寒い夕暮に家へ帰るのは、ほんとうに厭でならなかった。

いま言ったイライザとジョンとジョー・ジアナは、もう客間で彼らの母を取り巻いていた。母親は炉辺のソファに体をもたせながら可愛い子供たちを（この時だけは、けんかをしなかったし泣いてもいなかった）身のまわりにおいて、この上もなく幸福そうに見えた。彼女は私を、この仲間に入れてくれなかった。こう言って——ジェインをどうしても仲間はずれにしなければならぬのは残念だ。ジェインがもっと愛想のよい、子供らしい性質になるように、もっと人に好かれる、はきはきした態度をするように——つまり、どこもなく今よりも気軽に、わだかまりがなく、自然のままになるように心から本気になって努めていることをベシーから聞き、また自分でもそ

—

那天、出去散歩是不可能了。其实，早上我们还在光秃秃的灌木林中溜达了一个小时，但从午饭时起（无客造访时，里德太太很早就用午饭）便刮起了冬日凛冽的寒风，随后阴云密布，大雨滂沱，室外的活动也就只能作罢了。我倒是求之不得。我向来不喜欢远距离散步，尤其在冷飕飕的下午。试想，阴冷的薄暮时分回得家来，手脚都冻僵了，还要受到保姆贝茜的数落，又自觉体格不如伊丽莎、约翰和乔治亚娜，心里既难过又惭愧，那情形委实可怕。此时此刻，刚才提到的伊丽莎、约翰和乔治亚娜都在客厅里，簇拥着他们的妈妈。她则斜倚在炉边的沙发上，身旁坐着自己的小宝贝们（眼下既未争吵也未哭叫），一副安享天伦之乐的神态。而我呢，她恩准我不必同他们坐在一起了，说是她很遗憾，不得不让我独个儿在一旁呆着。要是没有亲耳从贝茜那儿听到，并且亲眼看到，我确实在尽力养成一种比较单纯随和的习性，



れを觀察してよく解るまでは、不平のない子供たちにだけしてやるような、いろいろの好い事に実際にジェインを仲間いりさせられないのは残念だ。

「あたしがどうしたとベシーが言うの？」

「ジェイン、わたしはね、埋くつを言ったり、訊きはじったりする子は大嫌い。それに子供のくせに年上の人をそんな風にとがめるのは、全く厭なものです。どこか他へ行っておかけ。そして愉快に口がきけるまで物を言わないでいらっしゃい」

小さな朝餐室は客間の隣りにあった。私はそこへこっそりはいった。部屋に本棚が一つあった。私はさっそく一冊を手にとった。あらかじめ、その本の中にさし絵がたくさんはいっているのを見ておいて。それから窓^{まど}框にあがって両足を寄せ、マホメット教徒のように、あぐらをかいた。こうして深紅の毛織のカーテンをほとんど引いてしまったので、私は二重のかくれ場所へ安全に納まってしまった。

右の方は深紅のカーテンが私の視野をさえぎり、左の方は透明な窓ガラスが私をかばってくれたけれども、荒涼とした十一月の日から私を引きはなしてはくれなかった。私は手にしていた本のページをくりながら、時々冬の日の午後の風景を眺めた。はるか遠くは青白い空漠とした霧と雲。すぐ近くには、濡れそぼつた芝生と雨に打たれた灌木があった。そして小止みなく降る雨は、悲しげな長い音をたてて吹きつける疾風に狂わしく追いまくられている。

私は手にしていた本に——ビューイックの「英国鳥禽史」に目を戻した。そこに書いてある挿絵を説明している字句など、ほとんど私は氣にとめなかった。だがやはり、子供ながらもしが

活泼可爱的举止,也就是更开朗、更率直、更自然些,那她当真不让我享受那些只配给予快乐知足的孩子们的特权了。“贝茜说我干了什么啦?”我问。“简,我不喜欢吹毛求疵或者刨根究底的人,更何况小孩子家这么跟大人顶嘴实在让人讨厌。找个地方去坐着,不会和气说话就别张嘴。”客厅的隔壁是一间小小的餐室,我溜了进去。里面有一个书架。不一会儿,我从上面拿下一本书来,特意挑插图多的,爬上窗台,缩起双脚,像土耳其人那样盘腿坐下,将红色的波纹窗帘几乎完全拉拢,把自己加倍隐蔽了起来。

在我右侧,绯红色窗幔的皱褶挡住了我的视线;左侧,明亮的玻璃窗庇护着我,使我既免受十一月阴沉天气的侵害,又不与外面的世界隔绝。在翻书的间隙,我抬头细看冬日下午的景色。只见远方白茫茫一片云雾,近处湿漉漉一块草地和受风雨袭击的灌木。一阵持久而凄厉的狂风,驱赶着如注的暴雨,横空扫过。我重又低下头看书,那是本比尤伊克的《英国鸟类史》。文字部分我一般不感兴趣,但有几页导言,虽说我是孩子,



南・北 第一章

きの数ページに白紙同様に見のがすことの出来ないことがあった。そのページには、海鳥の棲息地のこと、すなわち海鳥だけが棲んでいる「物淋しき岩石と岬一や、ノルウェーの最極南リンドネス、一名ネイズ岬からノース・ケープにかけて、小島が点在するノルウェー海岸のことが書いてあった――

そこは北海の大波うずまきて

いと速きシュリーの

裸島をめぐりて潮沸きかえる。

大西洋の怒濤は

風吹きすさむヘブリデイスの

島々の間に流れこむ。

また、ラブランド、シベリア、スピッツバーゲン、ノヴァゼンブラ、アイスランド、グリーンランドなどのもの淋しい海岸について述べてある文句も見のがせなかった――「北極帯の広大なる区域、荒涼たる孤立地方――霜と雪の貯蔵地、そこには幾星霜の冬が積み重ねた堅き氷原が、アルプス山の高さをいくつも重ねたほど高く氷にとざされて北極を圍繞し極寒の幾倍の峻烈な寒気を凝集している。――私はこれらの死のような地方について、私なりの考えを想像した。それは、子供たちの脳裡に、おぼろに浮ぶところの何やらつかみどころのない、すべての考え同様

却不愿当作空页随手翻过。内中写到了海鸟生息之地；写到了只有海鸟栖居的“孤零零的岩石和海岬”；写到了自南端林纳斯尼斯，或纳斯，至北角都遍布小岛的挪威海岸：

那里，北冰洋掀起的巨大漩涡，
咆哮在极地光秃凄凉的小岛四周。
而大西洋的汹涌波涛，
泻入了狂暴的赫布里底群岛。

还有些地方我也不能看都不看，一翻而过，那就是书中提到的拉普兰、西伯利亚、斯匹次卑尔根群岛、新地岛、冰岛和格陵兰荒凉的海岸。“广袤无垠的北极地带和那引起阴凄凄的不毛之地，宛若冰雪的储存库。千万个寒冬所积聚成的坚冰，像阿尔卑斯山的层层高峰，光滑晶莹，包围着地极，把与日俱增的严寒汇集于一处。”我对这些死白色的地域，已有一定之见，但一时难以捉摸，仿佛孩子们某些似懂非懂的念头，朦朦胧胧浮现在脑际，却出奇地生动。



日汉对照

简·爱

に、はつきりしないものではあるけれども、妙に印象的であった。はしがきのページの文句は次ぎの挿絵と関連していた。大浪と飛沫の中に、たった一つ孤立している岩や、淋しい海岸に打ちあげられた難破船や、月が幾すじかの横雲の間から今沈もうとしている難破船に冷たい蒼白い光りを投じているのを説明していた。

文字を刻んだ墓石のある寂しい教会の墓地、その門、二本の樹、朽ちこわれた塀壁にかこまれた低い平地、夕ぐれを告げている空の新月などに、どんな感情がつきまとったか私は言い表わせない。

風いだ海の上に静かに浮んでいる二艘の船を、私は海の幽霊だと思いこんだ。

悪魔が泥棒の包みを彼の背中に釘づけにしている絵は、大急ぎでページを繰った。それは、とても恐ろしいものであった。

岩の上に、黒い角をはやした鬼がたったひとりで坐っていて、絞首台のまわりに集まっている群衆を眺めている絵も恐ろしかった。

どの絵もお話を語っていた。私の幼稚な理解力と不十分な感情には、意味のわからないことばかりであったけれども、倦きることなく、ふしぎなほど心の底から面白かった。それはちょうど冬の夜に、ベシーが機嫌のよい時に私たちに語ってくれるお話のように面白かった。ベシーはそんな時、子供部屋の炉の傍へ火のし台を持ち出して、傍へ私たちを坐らせ、自分はいりど夫人のレースの飾りひだに縋で仕上げをしたり、夫人のナイト・キャップの縁をちぢめたりしながら、昔のお伽噺や、それよりも昔の古い俚謡から取った恋物語や冒険談、または（あとになって私に

导言中的这几页文字,与后面的插图相配,使兀立于大海波涛中的孤岩,搁浅在荒凉海岸上的破船,以及透过云带俯视着沉船的幽幽月光,更加含义隽永了。 我说不清一种什么样的情调弥漫在孤寂的墓地:刻有铭文的墓碑、一扇大门、两棵树、低低的地平线、破败的围墙。一弯初升的新月,表明时候正是黄昏。 两艘轮船停泊在水波不兴的海面上,我以为它们是海上的鬼怪。 魔鬼从身后按住窃贼的背包,那模样实在可怕,我赶紧翻了过去。 一样可怕的是,那个头上长角的黑色怪物,独踞于岩石之上,远眺着一大群人围着纹架。 每幅画都是一个故事,由于我理解力不足,欣赏水平有限,它们往往显得神秘莫测,但无不趣味盎然,就像某些冬夜,贝茜碰巧心情不错时讲述的故事一样。遇到这种时候,贝茜会把烫衣桌搬到保育室的壁炉旁边,让我们围着它坐好。她一面熨里德太太的网眼饰边,把睡帽的边沿烫出褶裥来,一面让我们迫不及待地倾听着一段段爱情和冒险故事,这些片段取自于古老的神话传说和更古老的歌谣,



第 一 章

解ったのだが)「バミラ」や「モアランドのヘンリー伯爵」の一節などを物語ってくれて、私たちの熱心な好奇心を満足させてくれるのであった。

ビュースイックを膝の上において私はその時幸福であった。少くとも私なりに幸福だった。ただ私は邪魔の入ることばかりを恐れていた。そしてそれは余りにも早く来た。朝餐室のドアが開いたのだ。

「ヤイ! まぬけ!」ジョン・リードがドアを開けると叫んだ。それから何も言わなかった。部屋に誰もいないらしいと思ったのだ。

「あの畜生どこにいるんだ?」また言い出した。「リジー! ジョージ!」と姉たちを呼んで「ジョナン(のここと)」はここにいないぜ。雨のふるのに外へ出たって、お母さんに言っておやり——畜生!」

「カーテンを引いておいてよかったわ」と私は心に思った。それから私はジョンがこの隠れ場所を、どうぞ見付けないようにと一生けんめいに心の中で祈った。ジョンならここを見つけようたって出来ない。彼は物を見つけたら、考えることは、すばしこくなかった。が、ちょうどこの時イライザが部屋をのぞきこむとたちまち叫んだ——

「ジャック(のここと)、あそこの窓框にいるわよ!」

これを聞くと、ジャックに引きずり出されたら、と思うだけで、もう恐ろしくて体が震えてきたので、すぐさまカーテンの外に出た。

「なんのご用?」私は、おずおず訊いた。

或者如我后来所发现,来自《帕美拉》和《莫兰伯爵亨利》。当时,我膝头摊着比尤伊克的书,心里乐滋滋的,至少是自得其乐,就怕别人来打扰。但打扰来得很快,餐室的门开了。“嘘! 苦恼小姐!”约翰·里德叫唤着,随后又打住了,显然发觉房间里空无一人。“见鬼,上哪儿去了呀?”他接着说。“丽茜! 乔琪!”(喊着他的姐妹)“琼不在这儿呐,告诉妈妈她窜到雨地里去了,这个坏畜牲!”“幸亏我拉好了窗帘,”我想。我急切希望他不会发现我的藏身之地。约翰·里德自己是发现不了的,他眼睛不尖,头脑不灵。可惜伊丽莎从门外一探进头来,就说:“她在窗台上,准没错,杰克。”我立即走了出来,因为一想到要被这个杰克硬拖出去,身子便直打哆嗦。“什么事呀?”我问,既尴尬又不安。



「リードさま、なんのご用でございますかと言えい」これが彼の答であった。「こっちへ来てくれ」言いながら彼は肘掛椅子に腰かけて、私にこっちへ来て彼の前へ立てということを身振りで示した。

ジョン・リードは十四才の小学生であった。私はわずか十才であつたので、彼は四つ年上であつた。彼は年のわりに体が大きく肥つていた。うすぎたない不健康そうな皮膚に、大面にはぼつたりした目鼻だち、不活発な四肢をして手足の先きが太くて大きかつた。食卓では必ずたらふく食べるのが習慣で、彼が胆汁質で、にぶつた爛れ目をして、しまりのないだぶだぶした頬をしてゐるのは、そのせいであつた。普通なら学校へ行っている時なのに、彼の母の言う「この子の虚弱な健康のため」に、二カ月のあいだ家へ引き取つていたのであつた。先生のマイルズ氏は、「うちからリードの許へ送るケーキやボンボンなどの量をもう少しへらしたら、彼の健康はずつとよくなる」と断言した。しかし母の心はそんな思いやりのない意見に耳を傾けなかつた。ジョンの血色のないのは勉強が過ぎるのと、おそらく家恋しさから来るのだらうという、ずつと人ぎさのよい意見であつた。

ジョンは母や妹たちにより愛情がなかつた。私には反感を持つていた。私をいじめたり、せっかんしたりした。一週に二、三度はおろか、一日に一、二度どころか、ひっきりなしに私をおどかしたり、いじめたりするのであつた。私のあらゆる神経は彼を恐れた。彼が私の傍近く来ると私の骨についている肉という肉は縮みあがるのであつた。彼が与える恐怖のために、私は頭が変になる時がよくあつた。彼におどかさされても、せっかんされても、私はてんでその訴えどころが

“该说‘什么事呀，里德少爷？’”便是我得到的回答。“我要你到这里来，”他在扶手椅上坐下，打了个手势，示意我走过去站到他面前。约翰·里德是个十四岁的小学生，比我大四岁，因为我才十岁。论年龄，他长得又大又胖，但肤色灰暗，一副病态。脸盘阔，五官粗，四肢肥，手脚大。还喜欢暴饮暴食，落得肝火很旺，目光迟钝，两颊松弛。这阵子，他本该呆在学校里，可是他妈把他领回来住上一二个月，说是因为“身体虚弱”。但他老师迈尔斯先生却断言，要是家里少送些糕点糖果去，他会什么都很好的。做母亲的心里却讨厌这么刻薄的话，而倾向于一种更随和的想法，认为约翰是过于用功，或许还因为想家，才弄得那么面色蜡黄的。约翰对母亲和姐妹们没有多少感情，而对我则很厌恶。他欺侮我，虐待我，不是一周三两次，也不是一天一两回，而是经常如此。弄得我每根神经都怕他，他一走近，我身子骨上的每块肌肉都会收缩起来。有时我会被他吓得手足无措，因为面对他的恐吓和欺侮，我无处哭诉。



第一章

ないからであつた。女中たちは、私の味方をしてまで若様のごきげんを損ねなくなかつた。リード夫人は全然こういう事に無関心であつた。ジョンは母の面前で私を殴ったり罵ったりしても、彼女は見ても見ないふりをし、聞いても聞かないふりをしていた。だが、母のいない所では、もっと、ひどくいじめるのであつた。

いつものように彼の言うことに従つて、私は彼の椅子の前へ行つた。彼は私に向つて二三分間、舌のつけ根を痛めないで出せるかぎり長く舌をつき出した。私は彼がすぐに私をなぐることが解つていた。そして、なぐられるのを恐ろしく思いながらも、やがてなぐらうとする彼の、いとわしい醜い顔付をつくづく眺めていた。私のこうした思いを彼は悟つたのかもしれない。いきなり彼は物も言わずに、力まかせに私をなぐつた。私はよろめいて、転びそうになつた体の均衡をとり戻しながら、彼の椅子から三、四歩あとずさりした。

「今のはお前がさっきお母さまに口返しをした生意氣の罰なんだ。それから、カーテンの後へこそそを隠れたり、たつた今お前があんな憎らしい目付きをした罰なんだぜ。止せやい！」

ジョンの罵倒は慣れっこになつてゐるので、それに口答えしようとは思ひもしなかつた。私の心配は罵倒の次ぎに必ずくる彼の殴打を、どうして耐えようかと言ふことであつた。

「カーテンのかけで何をしてゐたんだい？」彼は訊いた。

「本を読んでましたの」

「その本見せろ」

私は窓のところへ行つて、本を取つて彼に渡した。

佣人们不愿站在我一边去得罪他们的少爷，而里德太太则装聋作哑，儿子打我骂我，她熟视无睹，尽管他动不动当着她的面这样做，而背着她的时候不用说就更多了。我对约翰已惯于逆来顺受，因此便走到他椅子跟前。他费了大约三分钟，拼命向我伸出舌头，就差没有绷断舌根。我明白他会马上下手，一面担心挨打，一面凝视着这个就要动手的人那副令人厌恶的丑态。我不知道他看出了我的心思没有，反正他二话没说，猛然间狠命揍我。我一个踉跄，从他椅子前倒退了一两步才站稳身子。“这是对你的教训，谁叫你刚才那么无礼跟妈妈顶嘴，”他说，“谁叫你鬼鬼祟祟躲在窗帘后面，谁叫你两分钟之前眼光里露出那副鬼样子，你这耗子！”我已经习惯于约翰·里德的漫骂，从来不愿去理睬，一心只想着如何去忍受辱骂以后必然接踵而来的殴打。

“你躲在窗帘后面干什么？”他问。“在看书。”“把书拿来。”我走回窗前把书取来。



日汉对照 简·爱

「僕たちの本を持ちだすなんて、お前のすることじゃないぜ。お前は居候なんだ、お母さまが言ってたぜ。お前は一文なした。お前のお父さんが一文も財産をくれなかったんだ。乞食をするのが当然なんだ。僕たちみたいな紳士の子供と一緒に暮したり、僕たちと同じものを食べたり、お母さまのお金で着物を着たりするのは、まちがっているぜ。さあ、僕の本棚をかきまわすと、ただではおかないぞ。あれはみんな僕のだからな。この家のものが僕のものだからな。今は僕のでなくとも、二、三年すれば僕のものになるんだ。あっちへ行け、鏡と窓をよけて、ドアの前に立つんだ」

初めは彼がどういふつもりでこんなことを言ったのか気がつかないで、私は言われたとおりにドアの前に立った。が、彼が本を高く持ち上げて、私を目がけてそれを投げつける身がまえで立ったのを見た瞬間、私は本能的に恐怖の叫びを発しながら体をかわした。が、おそかった。本は投げとばされて、私に当たった。私はドアに頭を打って倒れ、怪我をした。血がにじみ出て、痛みがひどかった。こわいおそろしいの念が通り越してしまっ、別な感情が、わきおこった。

「ひどい、残酷な人！ あなたは人殺しみたいよ。奴隷の監督だわ——ローマの王さまたちとおんなじだわ！」と私は言った。

私はゴールド・スミスの「ローマ史」を読んだことがあった。そして、ネロやキャリギュラなどについて、私流の考をいだいていた。また、昔のその人たちとジョンを心の中で比較してみたこともあった。だが、それを今、声を高くして宣言するなどとは思ってもよらなかった。

「なに？ なに？」彼は叫んだ。「こいつ、僕に向かって言ったのか？ イライザ、ジョージアナ、

“你没有资格动我们的书。妈妈说的，你靠别人养活你，你没有钱，你爸爸什么也没留给你，你应当去讨饭，而不该同像我们这样体面人家的孩子一起过日子，不该同我们吃一样的饭，穿妈妈掏钱给买的衣服。现在我要教训你，让你知道翻我们书架的好处。这些书都是我的，连整座房子都是，要不过几年就归我了。滚，站到门边去，离镜子和窗子远些。”我照他的话做了，起初并不知道他的用意。但是他把书举起，拿稳当了，立起身来摆出要扔过来的架势时，我一声惊叫，本能地往旁边一闪。可是晚了，那本书已经扔了过来，正好打中了我，我应声倒下，脑袋撞到门上，碰出了血来，疼痛难忍。我的恐惧心理已经越过了极限，被其他情感所代替。 “你是个恶毒残暴的孩子！”我说。“你像个杀人犯——你是个奴隶监工——你像罗马皇帝！”我读过哥尔斯密的《罗马史》，对尼禄、卡利古拉等人物已有自己的看法，并暗暗作过类比，但决没有想到会如此大声地说出口来。 “什么！什么！”他大叫大嚷。“那是她说的吗？伊丽莎、乔治亚娜，



第九章 第二章

「君たち聞いたか？ お母さまに言わずにおくものか。いや、その前に——」

いきなり彼は私に飛びついた。私は髪と肩が彼にひつつかまれたのを感じた。彼は、死にもぐるいになつて私とつかみ合つていた。ジョンは実に暴君であり、人殺しであると、私はつくづく感じた。血が頭から二滴三滴私の首筋に伝わつてきて、刺すような痛みを感じた。この感覚が、しばらく恐ろしさを打ち負かしてしまつた。私は気狂いみたいになつて彼の相手をした。自分の手が、どんなことをしたのか覚えていないが、ジョンが、畜生ッ！ 畜生ッ！ と私を呼んで、大声でわめいていた。味方がジョンのそばにいた。イライザとジョージアナは二階にいるリード夫人を呼んでこようと、とつくに走つて行つたのであつた。この時リード夫人はベシーと小間使のアボットをうしろにしたがえて、この場にあらわれた。私とジョンは引きわけられた。こんなことが私の耳にはいつた——

「まあ！ まあ！ ジョン坊ちゃまに食つてかかるなんて、なんて気狂い沙汰でしょう！」

「こんな怒った恰好は見るもはじめてですわ！」

リード夫人の言葉がこれにつけ足した。

「赤い部屋へつれてお行き。いれたら鍵をかけるんですよ」
すぐに四つの手が私を取りおさえた。私は二階へ運ばれた。

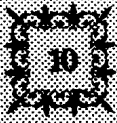
二

私は極力反抗した。こんなことは、私としては、はじめてであつたが、これは、とかく私のこ

你们可听见她说了？我会不去告诉妈妈吗？不过我得先——” 他向我直冲过来，我只觉得他抓住了我的头发和肩膀，他跟一个拼老命的家伙扭打在一起了。我发现他真是个暴君，是个杀人犯。我觉得一两滴血从头上顺着脖子淌下来，感到一阵热辣辣的剧痛。这些感觉一时占了上风，我不再畏惧，而发疯似地同他对打起来。我不太清楚自己的双手到底干什么，只听得他骂我“耗子！耗子！”一面杀猪似地嚎叫着。他的帮手近在咫尺，伊丽莎和乔治亚娜早已跑出去讨救兵，里德太太上了楼梯，来到现场，后面跟随着贝茜和女佣艾博特。她们把我们拉开了，我只听见她们说：“哎呀！哎呀！这么大的气出在约翰少爷身上！”“谁见过那么火冒三丈的！”随后里德太太补充说：“带她到红房子里去，关起来。”于是马上就有两双手按住了我，把我推上楼去。

二

我一路反抗，在我，这还是破天荒第一次。于是大大加深了贝茜和



とを悪くとうとうとしてゐるベシーやアボットの氣持を、いっそう強めてしまった。實際のところ、私は氣が憂になつてゐた。というよりも、フランス人のよく言うように、正氣を失つてゐたのだ。私は、一時の反抗が、この時はやくも奇怪な懲罰を受けねばならなくなったのを知つた。そこで、反抗を企てる奴隷と同じように、やくそくになつてしまつて、どんな思ひきつたことでもしてやろうと決心した。

「アボットさん、両方の腕を押えてやつて頂戴。氣狂い猫みたい」

「まあ、どうしたことですか！」と夫人つきの小間使が叫んだ。「ひどいことをするじゃありませんか、エアさん、若さまを殴るなんて、あなたの恩人の坊ちゃんを、あなたのご主人を！」

「ご主人！ どうしてあたしのご主人なの？ あたし召使なの？」

「いいえ、召使よりも下です。食ふたり着たりするために、あなたは何もできないのですからね。さ、お坐り、自分の悪かつたことをよく考えてみるんですよ」

すでに彼女たちはリード夫人に指図された赤い部屋へ私を運んで、腰掛の上にぐいと私を押つけたのである。思わず私はバネみたいに跳びあがつた。と、たちまち四本の手が私を押えつけた。

「じつとしていないと、縛りつけますよ」とベシーが言った。「アボットさん、あなたの靴下どめをかして頂戴。あたしのは、じきにこの子切つてしまふわ」

アボットは急場の紐にと、わきを向いて太い脚から靴下どめをはずしにかかった。縛る用意や、それが意味するまだその上のはずかしめは、私の興奮を幾らかしづめてしまった。

艾博特小姐对我的恶感。我确实有点难以自制，或者如法国人所说，失常了。我意识到，因为一时的反抗，我不得不遭受古怪离奇的惩罚。于是，像其他造反的奴隶一样，我横下一条心，决计不顾一切了。“抓住她的胳膊，艾博特小姐，她像一只发了疯的猫。”“真丢脸！真丢脸！”这位女主人的侍女叫道，“多可怕的举动，爱小姐，居然打起小少爷来了，他是你恩人的儿子！你的小主人！”“主人！他怎么会是我主人？难道我是仆人不成？”“不，你连仆人都不如。你不干事，吃白食。喂，坐下来，好好想一想你有多坏。”这时候她们已把我拖进了里德太太所指的房间，推搡到一条矮凳上，我不由自主地像弹簧一样跳起来，但立刻被两双手按住了。“要是你不安安稳稳坐着，我们可得绑住你了，”贝茜说，“艾博特小姐，把你的袜带借给我，我那付会被她一下子绷断的。”艾博特小姐转而从她粗壮的腿上，解下那条必不可少的带子。捆绑前的准备工作以及由此而额外蒙受的耻辱，略微消解了我的激动情绪。



簡・愛 第二章

私は叫んだ。「とらないで頂戴、もうあばれないわよう！」それを保証するため、私は腰かけさせられた場所に両手でしがみついた。

「きっとあばれないですよ」とベシーが言った。そして私がほんとうにおとなしくなったのを見ますと、押えていた手を放した。それから彼女とアボットは腕をこまぬき、私が正気かどうかを、半信半疑な様子で暗い顔付をして私の顔を見ながら、つつ立っていた。

「この子は前にこんなことしたことがなかったのよ」と、やっとベシーは小間使の方を向いて口を切った。

「でも、いつもこうよ」という答だった。「あたしいつも奥さまにあたしの考を申上げたのよ。奥さまだって同じお考よ。この子は陰険なのよ。こんな年で、こんな猫かぶりの子って見たことがないわ」

ベシーは何とも答えなかった。やがて私にむかってこう言った。

「あなたはね、リード夫人のご厄介になっているってことを、よくくわきまえなけりゃいけませんよ。奥さまがあなたに食べさせたり、着せたりなさるのですよ。もしや追い出されてごらんなさい、あなたは養育院のご厄介になるのですよ」

私はこうした言葉には、何も言うすべがなかった。これは耳新しい言葉でなかった。私が物心ついてからの思い出は、みんなベシーの言葉と似たようなことばかりであった。私が居候であるという非難は、私の耳に漠然とした単調な歌のように聞こえるようになった。とても痛々しい、おしつぶされそうできて、意味がはっきり解らないものであった。

“别解啦,”我叫道,“我不动就是了。” 作为保证,我让双手紧挨着凳子。 “记住别动,”贝茜说,知道我确实已经平静下去,便松了手。随后她和艾博特小姐抱臂而立,沉着脸,满腹狐疑地瞪着我,不相信我的神经还是正常似的。 “她以前从来没有这样过,”末了,贝茜转身对那位艾比盖尔说。 “不过她生性如此,”对方回答,“我经常跟太太说起我对这孩子的看法,太太也同意。这小东西真狡猾,从来没见过像她这样年纪的小姑娘,有那么多鬼心眼的。” 贝茜没有搭腔,但不一会便对我说: “小姐,你该明白,你受了里德太太的恩惠,是她养着你的。要是她把你赶走,你就得进贫民院了。” 对她们这番话,我无话可说,因为听起来并不新鲜。我生活的最早记忆中就包含着类似的暗示,这些责备我依赖别人过活的话,已成了意义含糊的老调,叫人痛苦,让人难受,但又不太好懂。艾博特小姐答话了:

「アボットがベシーと同じようなことを言った——「だからあなたは、お嬢さま方や坊ちゃまと同等だなんて考えちゃだめですよ。奥さまは親切すぐで自分のお子たちと一緒に育てて下さるんですからね。いまに、あのかたたちは、どっさりお金をお持ちになるでしょうけど、あなたは無一文でしょ。頭をさげて皆さまのお気にさからわれないようにするのがあなたの務めというものですわ」

「あたしらが言うことは、みんなあなたのためを思っているからですよ」とベシーがやさしく言った。「あなたは皆さまのお役に立つ気持のよい子にならなけりゃいけませんよ。そうなると、ここをお家にする事が出来るでしょう。でも癪癪をおこしたり無作法なまねをしたら奥さまは追い出しておしまいになりますよ」

「そればかりでなく、」とアボットが言った。「神様はそんな子を罰しますよ。癪癪をおこしていると、たちまちその子の命を取って、おしまいになるのよ。そんなことになったら、その子はどこへ行くかと言えば、地獄ですよ。さあ、ベシーさん、置いて行きましょ。あたし、何をあげると言われても、この子のような性質はまっぴらお断りだわ。ジェインさん、独りぼっちになったらお祈りするがいいわ。悔い改めないと、あの煙突から恐い者が降りてきて、あなたをさらって行きますよ」

二人はドアを閉めて、それに錠をおろして行ってしまった。

この赤い部屋は、ふだんは使用されない寢室で、人がこの中で眠ることは、ほとんど無かった。ゲーツヘッド荘で一時に大勢のお客が訪れて、この邸内全部の部屋が宿泊に用立てる必要に迫ら

“你不能因为太太好心把你同里德小姐和少爷一块抚养大，就以为自己与他们平等了。他们将来会有很多很多钱，而你却一个子儿也不会有。你得学谦恭些，尽量顺着他们，这才是你的本分。” “我们同你说的全是为了你好，”贝茜补充道，口气倒并不严厉，“你做事要巴结些，学得乖一点，那样也许可以把这当个家住下去，要是你意气用事，粗暴无礼，我敢肯定，太太会把你撵走。” “另外，”艾博特小姐说，“上帝会惩罚她，也许会在她要脾气时，把她处死，死后她能上哪儿呢？来，贝茜，咱们走吧，随她去。反正我是无论如何打动不了她啦。爱小姐，你独个呆着的时候，祈祷吧。要是你不忏悔，说不定有个坏家伙会从烟囱进来，把你带走。” 她们走了，关了门，随手上了锁。红房子是间空余的卧房，难得有人在里面过夜。其实也许可以说，从来没有。除非盖茨黑德府上偶而拥进一大群客人的时候，才有必要动用全部房间。



第二章

れない限り、実に、絶対にないと言ってもよい。けれどもこの赤い部屋は、この邸にある最も大きく、最も荘麗な寢室の一つであった。マホガニー材のどっしりした脚に支えられている寝台は、深紅の紋織子の帷が垂れさがっていて、部屋の中央に神のお仮屋のように据えられてあった。いつもブラインドをおろしたままの大きな二つの窓には、同じく深紅色のカートンがさがっていて、花綵のようになったり、垂れさがったりして半分窓をおおっていた。カーベットは赤い色であった。寝台の足許にあるテーブルは深紅色の布でおおわれ、壁はほんのりピンク色を帯びた淡い鹿毛色であった。衣裳簞笥、化粧台、椅子等いずれも磨きこまれて黒ずんだ古いマホガニー材であった。こうした周囲の濃い、深い陰影の中に、寝台に積み重なった敷布団と枕は、純白のマルセーユ織のカヴァーでおおわれて高くもりあがり、白く光っていた。枕もと近くにあるふんわりとした大きなクッションのある安楽椅子も純白で、足台を前に、寝台に劣らず白く際立って見えた。私には、青白い玉座のように思われた。

この部屋はほとんど火を焚くことがなかったから、ひえびえしていた。子供部屋と台所から遠くはなれているので寂として物音一つ聞こえなかった。人のはいることはめったにない部屋だと知られているので、荘嚴な感じが漂っていた。ただ土曜日毎にここの姿見やいろいろの道具に静かにつもった一週間の塵を払いに女中がはいると、リード夫人が衣裳簞笥の秘密の引出しの中のものや、夫人の宝石函や、病死した夫人の良人の小型肖像画などが納められていた。この病死した良人という言葉に赤い部屋の秘密がこもっていた——この部屋が荘麗であるにもかかわらず、

但府里的卧室,数它最宽敞、最堂皇了。一张红木床赫然立于房间正中,粗大的床柱上,罩着深红色锦缎帐幔,活像一个帐蓬。两扇终日窗帘紧闭的大窗,半掩在清一色织物制成的流苏之中。地毯是红的,床脚边的桌子上铺着深红色的台布,墙呈柔和的黄褐色,略带粉红。大橱、梳妆台和椅子都是乌黑发亮的红木做的。床上高高地叠着褥垫和枕头,上面铺着雪白的马赛布床罩,在周围深色调陈设的映衬下,白得眩目。几乎同样显眼的是床头边一把铺着坐垫的大安乐椅,一样的白色,前面还放着一只脚凳,在我看来,它像一个苍白的宝座。房子里难得生火,所以很冷;因为远离保育室和厨房,所以很静;又因为谁都知道很少有人进去,所以显得庄严肃穆。只有女佣每逢星期六上这里来,把一周内静悄悄落在镜子上和家具上的灰尘抹去。还有里德太太本人,隔好久才来一次,查看大橱里面某个秘密抽屉里的东西。这里存放着各类羊皮文件,她的首饰盒,以及她已故丈夫的肖像。上面提到的最后几句话,给红房子带来了一种神秘感,一种魔力,



こんなに物さびしく感じさせる怪しい力が。

リードさんが亡くなられてから、もう九年になる。リードさんが最後の息を引きとったのは、この寝室であった。最後の告別のため、死者が安置されたのは、この部屋であった。ここから棺が葬儀人夫に運びだされた。そしてその日から、聖別の淋しい気味悪い感じが人々の足をこの部屋から遠のかせているのであった。

ベシーとひどいアボットが、ここから動いてはいけなと言いつけて行ってしまったところは、大理石の炉棚の傍におかれた低い褥付椅子であった。寝台は私の前に高く立っていて、右に丈の高い黒ずんだ衣裳簞笥があった。薄暗い断続的光線が、その衣裳簞笥の鏡板の光沢に強弱をつけていた。左は、ブラインドにすっかりおおわれた窓があり、窓と窓との間にある大きな姿見は、寝台と部屋の空虚な莊嚴さを映していた。私はベシーたちが、ほんとうにドアに錠をおろしたかどうか、はつきり知らなかったもので、体を動かす勇氣が出ると、起きあがって見に行った。ああ！ 錠がおりていた。どんな牢獄もこれ程ではないと思うほど嚴重に、引き返すとき、姿見の前を通らなければならなかった。我知らず引き寄せられた私の目は、思わず鏡の面の奥底を探り見た。そこに映っている実体のない空の影の方が、実際に見るよりも冷やかに薄暗く見えた。そしてそこに、一人の奇妙な子供の姿が、ほの白い顔と腕とを、点をうったように浮きだして、あたりのものは、皆ひそまり返っている中に、恐怖におびえた目を光らせて私を凝視しているさまは、ほんとうの幽霊のように見えた。ベシーの晩の物語によく出てくる、荒野の淋しい羊歯の茂った谷間から、道に行き暮れた旅人の前に現われる妖精とも小鬼ともつかぬ小さな化物に似て

因而它虽然富丽堂皇，却显得分外凄清。里德先生死去已经九年了，他就是在這間房子里咽气的，他的遗体在这里让人瞻仰，他的棺材由殡葬工人从这里抬走。从此之后，这里便始终弥漫着一种阴森森的祭奠氛围，所以不常有人闯进来。贝茜和刻薄的艾博特小姐让我一动不动坐着的，是一条软垫矮凳，摆在靠近大理石壁炉的地方。我面前是高耸的床，我右面是黑黢黢的大橱，橱上柔和、斑驳的反光，使镶板的光泽摇曳变幻。我左面是关得严严实实的窗子，两扇窗子中间有一面大镜子，映照出床和房间的空旷和肃穆。我吃不准她们锁了门没有，等到敢于走动时，便起来看个究竟。哎呀，不错，比牢房锁得还紧呐。返回原地时，我必须经过大镜子跟前，我的目光被吸引住了，禁不住探究起镜中的世界来，在虚幻的映象中，一切都显得比现实中更冷落、更阴沉。那个陌生的小家伙瞅着我，白白的脸上和胳膊上都蒙上了斑驳的阴影，在一切都凝滞时，唯有那双明亮恐惧的眼睛在闪动，看上去真像是一个幽灵。我觉得她像那种半仙半人的小精灵，恰如贝茜在夜晚的故事中所描绘的那样，从沼泽地带山蕨丛生的荒谷中冒出来，现身于迟归的旅行者眼前。